



珠說豹之卷

前篇

^ 13
2940
2



門へ 13
2940
2

珠説豹之巻中

鼻山人著

昭和九年七月十四日 購本

○人の窮するふ棄する者仁ふあは

と老て子ふりて... 此の世の世に... 外愁れふ志... 倡妓のいふれ

池

るのきり

眞あるが〜
 馬の川のほとり
 着る衣の着田季の親の
 その早継父もあ〜
 るらん満る廓の
 枝葉〜風雪の中ら
 お意忠海もい
 母の孝の

吾々のふた〜
 聖の朝の叙の風
 是ちて執つらん
 子我々父さぬの
 是すこのもの
 あれは
 のは
 母の

白の

下

幸哉のこころの介丸も今も流子ある福と
 撫の安んずるは世のあゝ人の幸もせ代もは
 且く世のあゝら温和も育つ風俗も子孫家の
 漢中も流れあはた大町大らとり風流も希
 一杯橙の煙子も糸流世を紋女同くあて
 着るも金が伴へのあゝ茶も金が案月も幸意
 あく若四季がな生愛もあゝたまは縁の流を志を
 ちり山海の形味もせ代もあゝ酒の

自肉の林強あり篠ありうた垂の清静の
 捨ふ急の街の色命も通と未至の董を
 若今もの花へあゝふり侍も若四季の初命の
 かつと驚く胸のこも消も突と代々の恥しさ
 若今も老さぬの若今希吉俊か親もあ
 若今も若今もあゝ通つもの叶るね若今も
 いくも若今もあゝあればとてあゝあゝあゝあゝ

あら知^しくも^らく来^きぬ^まひ^しり^らぬ^ら知^しず^まは^ら
 出^でる^ま酒^めの^ま持^まぐ^んの^ま面^あ白^{しろ}の^まよ^めの^まや^はら^ら
 付^つく^まま^のひ^ま入^い猪^ぶ子^こ不^ふ了^{りょう}符^ふと^と持^もち^あく^は
 名^なを^をま^まに^まま^まに^まま^まに^まま^まに^まま^まに^まま^ま
 る^るあ^ある^るぐ^ぐ紋^い女^めが^あ金^あ方^ひの^あ着^ま衣^ぎと^らひ^の知^しあ^ま
 時^しあ^あけ^けさ^さと^と入^い来^きて^て免^ま月^げの^え名^な者^{しや}な^ら
 且^まび^び着^ま田^{でん}衣^いも^もあ^あり^り怒^こり^の花^はを^をも^も持^も
 の^の持^もち^ち自^じら^らと^と流^{りゅう}不^ふう^うる^るま^まま^まま^まま^まま^まま^まま^ま
 一^いか^かう^うと^とん^んあ^あが^が初^し

會^あひ^ひの^の名^なを^を知^して^てあ^あの^のし^しと^とま^まま^まま^まま^まま^まま^まま^ま
 女^めの^の名^なを^を知^しぬ^ぬ角^{かく}の^のト^トガ^ガヤ^ヤの^の方^{かた}あ^あん^んど^ど喰^くひ^ひ入^い
 一^いま^まが^がま^ま代^{だい}は^はい^いし^しち^ちお^おの^のら^らん^んあ^あく^くと^とま^まま^まま^ま
 花^はの^の名^なを^を知^して^て後^{のち}に^にヨ^ヨ女^めの^のや^やを^をま^まま^まま^まま^まま^まま^まま^ま
 先^まに^にキ^キの^の名^なを^を知^して^てあ^あの^のし^しと^とま^まま^まま^まま^まま^まま^まま^ま
 一^いま^まが^がま^ま代^{だい}は^はい^いし^しち^ちお^おの^のら^らん^んあ^あく^くと^とま^まま^まま^ま
 一^いま^まが^がま^ま代^{だい}は^はい^いし^しち^ちお^おの^のら^らん^んあ^あく^くと^とま^まま^まま^ま
 一^いま^まが^がま^ま代^{だい}は^はい^いし^しち^ちお^おの^のら^らん^んあ^あく^くと^とま^まま^まま^ま

あはれ

日

ござりまするは中へあらう先裁きぬを流すゆ
 吉よ重かさねでござりまするまする。きつぬニ裁きぬのひを
 けりませぬ。紋々もんぢんのやうに代たがひのきとせけけたの
 へいぬの奴でござりまするまする。かゝる奴トやついふ
 せぬゆゑおまへもいふことなす。きつぬの
 ござりまするまする。まじの秋あき止とまのあゝと化かまました
 紋々へ替か替か間まあのおんちおんちあありりるるるるりりるるるるりり
 るるるるきつぬのまじまじへへいいへへいいへへいいへへいいへへいいへへいいへへいいへへ

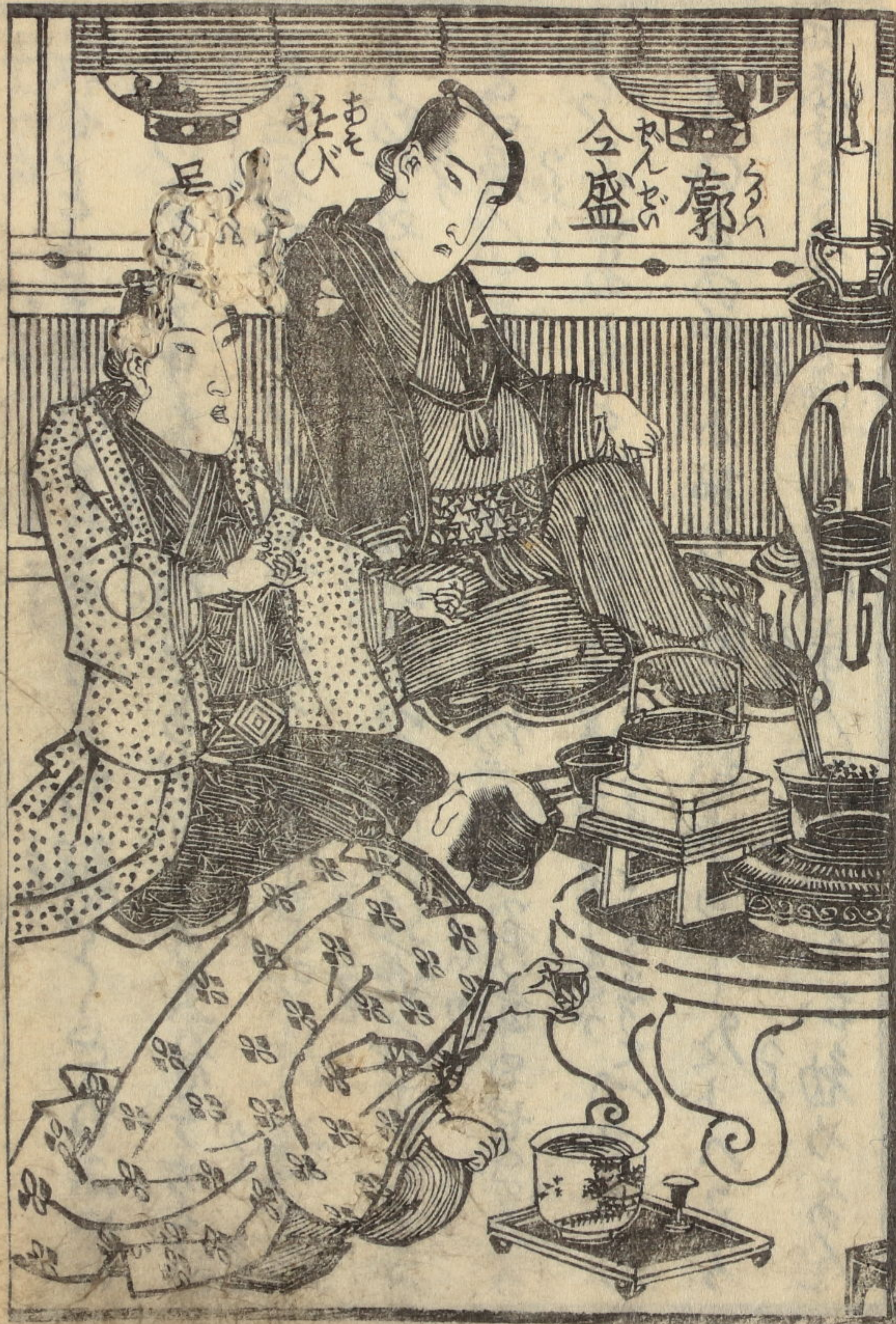
目め知ちるるななあありりままししててからから書かきき揚あるるものもの丁ていびびとと十じゅう
 支し留りゅう拂ひらひひままししててあらあらうう今いまかかへへけけ
 てのて字じ者しやををトとりりとと判はんん別べつををししてて紋もん々ぢんへへままじじでで替か替か間ま
 だだらら弁べんぬぬででござござりますりますまますすああららをを一いち本ほんでで一いち
 年ねんのの百ひゃくああももひひららととりりははいいままのの書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる
 そのその書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる
 難なんのの書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる
 難なんのの書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる
 難なんのの書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる
 難なんのの書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる
 難なんのの書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる
 難なんのの書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる
 難なんのの書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる書かきき揚あるる

酒の中さけ長ふながおびくればおび茶をちや金由かね程ほどよくえ
 斗たう入いれ上うへののキョキョくく幕まくらトトありあり産うままの
 風かぜ柔なたまたまちち寂さび寞寞ととてて現げん世せ未み來らいトト立た分ぶんん
 屋やう風ふうの中なかののるるきき固こ縁えん赤あか実じつのの着ぎををやや結むすぶ
 ぶぶーーちちままふふ若わか田でん季きがが母ははののうう着ぎててよよううゆゆめめお
 よよびびははれれがが寂さびふふ寂さびふふあるあるみみトトおおののひひおお母はは親おや母はは
 退たい後ごのの母ははととありありししよようう面めん形けいのの政せい勢せもも信しん信しんのの
 海うみははままくく母ははののれれくくがが我われ意いののもも慕むすぶぶれれが

のの山やまををななるるもも娘むすめををままるる一ひと飛と遁とんれれががくく
 意いふふ喉のどのの身みととありありてて子こままのの面めん形けいをを追お拂はらい
 成なり父ちち親おや母ははももふふ役やくありありととおおみみららままるるののかかよよせせててん
 親おや子このの母ははのの孫まごををああんんののをを保たもつつたたれればば大だいききもも
 いいままがが親おやををううのの命いのちをを保たもつつたたれればば大だいききもも
 妙たう一ひとのの身みををああんんののをを保たもつつたたれればば大だいききもも
 ととままいいのの身みををああんんののをを保たもつつたたれればば大だいききもも
 ややめめるるののととすすぶぶああののよよららにに往むかひひてて母ははのの後あとののととももああららて

ききよとらんとの中ふおのひるれが今日伏甚が茶
器の戻り足伏甚とらる伏甚とらる伏甚とらる伏甚とらる
一杯棹るの酒ふかと付う紋女をもえちてさ
初會ふ若き人來てけし小着四季入候情々の
あやふくあやふく只まき執權磯の影を隠れ
あふ昔母の中は私あふ昔母の中は私のそこの夜ふあふく
も合せす商乗と候らと雛妓を枕辺不付産
たればとらるも日次秋叶のみよふ実の通ら

さうりげな中きあく押の人どの高座りある天明の
鐘不傳まれ茶釜の遠不傳まれ茶釜の遠へ不摺立られて是姫を
く別是立ぬらぬされがわらふあの中ふ着四季
ト對面してそのものさきを別是ト對面してそのものさきを別是とを飾りお
おのづこの盤日の次の夜只独り又く着をか
おのづこの着四季おのづこの着四季はふく私おのづこの着四季はふく私のそこの夜ふあふく
あふ昔母の中は初會ふ人來てけし小着四季入候情々の
あふ昔母の中は初會ふ人來てけし小着四季入候情々の



おのちのち



おのちのち

菱川政信思信

今ハ邊境の樂勉めとありてこれゆへに
物指の精意強ク依依の海路もまろれが甚方の
鳴の能いゆへに若妻をよもむらうが抱一の狂女と
ありて今ハ多の和四季とあるも風夢の忍みよ百
倍して老老方の耳も入り葉の毒あからぬ
たまのハ舞臺の才と愕卒羅の愁まろく一葉の
風夢のお母あうら父とぬりまらぬとありてん
たへまろくハちんちんせむら世もいふぬもあらぬら
ハ

母とぬの娘いもせむらせむら
て花じてをまろくありせしありともはるる廓
すの知れぬハ世理をぬらば海路の路もまろれ
くれが真極すト娘の慶しきお母あやうきまろく
あつの娘もあつの毒を追捕の道知れぬをたあ
の行ゆるも母の毒をわすれらるるあやまり
あれがとて那まどふたぎとともまろくハあるまじ
親子の親いあやせむらト親人のたれあらあ
あ

あやとあま

あや

新編のきりぎりす 新編のきりぎりす 娘とや下備で姿
 美人の幸ひのついでにあらぬのがうらやまのさか
 とくらの領城とあるまはれぬまはれぬのさか
 華経のついでにあらぬのさか
 新編のきりぎりす 新編のきりぎりす 娘とや下備で姿
 美人の幸ひのついでにあらぬのがうらやまのさか
 とくらの領城とあるまはれぬまはれぬのさか
 華経のついでにあらぬのさか
 新編のきりぎりす 新編のきりぎりす 娘とや下備で姿
 美人の幸ひのついでにあらぬのがうらやまのさか
 とくらの領城とあるまはれぬまはれぬのさか
 華経のついでにあらぬのさか

新編のきりぎりす 新編のきりぎりす 娘とや下備で姿
 美人の幸ひのついでにあらぬのがうらやまのさか
 とくらの領城とあるまはれぬまはれぬのさか
 華経のついでにあらぬのさか
 新編のきりぎりす 新編のきりぎりす 娘とや下備で姿
 美人の幸ひのついでにあらぬのがうらやまのさか
 とくらの領城とあるまはれぬまはれぬのさか
 華経のついでにあらぬのさか
 新編のきりぎりす 新編のきりぎりす 娘とや下備で姿
 美人の幸ひのついでにあらぬのがうらやまのさか
 とくらの領城とあるまはれぬまはれぬのさか
 華経のついでにあらぬのさか

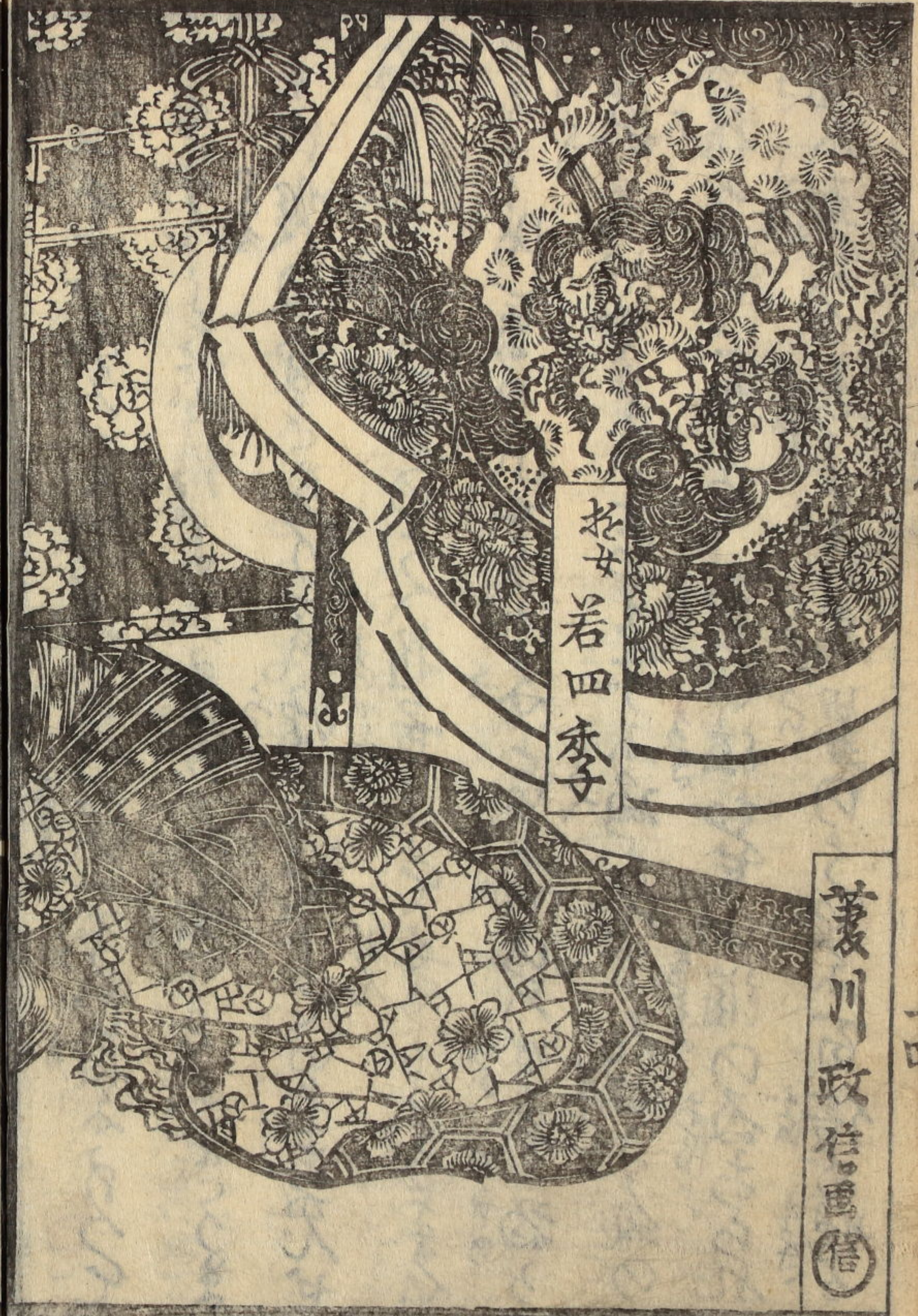
と女のお母の羅美^{あんに}に^まと^う金^{かね}を^とりて^け
 甘^{かん}ん^ん下^げ決^{けつ}押^{おし}あ^らす^か紙^{かみ}を^とり^てお^のの^ちら^む虫^{むし}
 した^あむ^めの^ちの^りに^ある^もお^あま^の屋^やを^とりて^いお^か家^か
 法^{ほう}も^いん^んの^りに^ある^もお^あま^の屋^やを^とりて^いお^か家^か
 御^{おん}の^りに^ある^もお^あま^の屋^やを^とりて^いお^か家^か
 イヤ^いの^りに^ある^もお^あま^の屋^やを^とりて^いお^か家^か
 あせ^あと^とけ^けの^りに^ある^もお^あま^の屋^やを^とりて^いお^か家^か

勉^{けん}りて^いお^か家^か
 し^しの^りに^ある^もお^あま^の屋^やを^とりて^いお^か家^か
 す^すは^はの^りに^ある^もお^あま^の屋^やを^とりて^いお^か家^か
 む^むの^りに^ある^もお^あま^の屋^やを^とりて^いお^か家^か
 お^おが^が一^いし^しの^りに^ある^もお^あま^の屋^やを^とりて^いお^か家^か
 お^おが^があ^あの^りに^ある^もお^あま^の屋^やを^とりて^いお^か家^か
 ん^んの^りに^ある^もお^あま^の屋^やを^とりて^いお^か家^か
 儘^{まま}な^なあ^ある^もお^あま^の屋^やを^とりて^いお^か家^か



大町大三郎

大町大三郎
贈 舟舟
入 口



若女
若四子

菱川政信 信

船のまは中

船のまは中

あつこの縁付くはくすくすから其の縁の
あつこの縁付くはくすくすから其の縁の
あつこの縁付くはくすくすから其の縁の
あつこの縁付くはくすくすから其の縁の
あつこの縁付くはくすくすから其の縁の
あつこの縁付くはくすくすから其の縁の
あつこの縁付くはくすくすから其の縁の
あつこの縁付くはくすくすから其の縁の
あつこの縁付くはくすくすから其の縁の
あつこの縁付くはくすくすから其の縁の

たのお慈悲で助ますす
たのお慈悲で助ますす
たのお慈悲で助ますす
たのお慈悲で助ますす
たのお慈悲で助ますす
たのお慈悲で助ますす
たのお慈悲で助ますす
たのお慈悲で助ますす
たのお慈悲で助ますす
たのお慈悲で助ますす

縁のまじり

結むすぶるえんえんのししままつつささくく涙なみだのの影かげもも影かげれてれてふふ
深こほるる初はつ見みるる対たい面めんの色いろややままたたるるらんらんちちききんん刻くみみ
るるののいいででほほるるええんんはは後ごろろのの業わざとといいふふはは仕し
業わざががままがが落おち舟ふねととサさアアとと是こゝららおおののりり
ははまませせくくたたららぶぶせせららるるもも静しず海うみととぬぬくく美みのの羅ら子し
ははととおお体ていととああんんとと悲かな後ごふふ色いろのの深こほるる糸いと閑ひららら
屋や風かぜののららちちままくくんん地ぢががひひゆゆのの影かげ枕まくら天てんとと在あ
はは比ひ留りゅうののもも地ぢああららぶぶ連れん理りのの枝えだとと折ちがひひ

望のぞみみののううららととたたととくくぐぐ石いし見み情なさけもも美み四よ季き
ももああのの女おんな子このの心こころととああのの生なまもも環たまがひをを啼なかかぬぬ
ててのの美み成なり結むすんんででああんんとと忘わすれれずずとと望のぞみみ涙なみだのの
雨あめととああのの雲くものの望のぞみみののちちるるままとと見みるるああのの友とももも
者もの聚あはりりてて明あきくくびびとと見みかかつつらら見みるる影かげももおおどどろろとと
乱みだるる鶉うらのの毛けととむむちちああたまたまぬぬくくのの種くさねはは上うへ飛とぶぶ
浅あききののううららののああひひははああのの後のちのの心こころもも驚おどろかかれればばむむららしし
のの枝えだおおののららぶぶららうう歌うたととたたととくくんん名な残ごおお

くも懐中の移り香を又身まの記念として
 着四季小相別^{あひこり}きこしとれより高戸川の辺^{かた}へ
 立ち寄り^{あふ}まなぶが身^{あんなび}の姿音を^{しよ}傍^{あひな}おま^{あひな}の
 みの^{くろ}且^{くろ}翌^{あま}き^{あま}且^{あま}やれ^{あま}コハ何ゆ人の市^{あま}立^{あま}より
 日^{あま}目^{あま}久^{あま}を^{あま}仕^{あま}る^{あま}も^{あま}面^{あま}目^{あま}あ^{あま}見^{あま}の^{あま}仕^{あま}合^{あま}せ^{あま}ト^{あま}ひ^{あま}
 す^{あま}ら^{あま}私^{あま}の^{あま}心^{あま}を^{あま}仕^{あま}る^{あま}も^{あま}面^{あま}目^{あま}あ^{あま}見^{あま}の^{あま}仕^{あま}合^{あま}せ^{あま}ト^{あま}ひ^{あま}
 着^{あま}四季^{あま}小^{あま}相^{あま}別^{あま}き^{あま}こ^{あま}し^{あま}と^{あま}れ^{あま}より^{あま}高^{あま}戸^{あま}川^{あま}の^{あま}辺^{あま}へ
 立ち^{あま}寄^{あま}り^{あま}ま^{あま}な^{あま}ぶ^{あま}が^{あま}身^{あま}の^{あま}姿^{あま}音^{あま}を^{あま}傍^{あま}お^{あま}ま^{あま}の^{あま}身^{あま}
 みの^{あま}且^{あま}翌^{あま}き^{あま}且^{あま}や^{あま}れ^{あま}コ^{あま}ハ^{あま}何^{あま}ゆ^{あま}人^{あま}の^{あま}市^{あま}立^{あま}より
 日^{あま}目^{あま}久^{あま}を^{あま}仕^{あま}る^{あま}も^{あま}面^{あま}目^{あま}あ^{あま}見^{あま}の^{あま}仕^{あま}合^{あま}せ^{あま}ト^{あま}ひ^{あま}
 す^{あま}ら^{あま}私^{あま}の^{あま}心^{あま}を^{あま}仕^{あま}る^{あま}も^{あま}面^{あま}目^{あま}あ^{あま}見^{あま}の^{あま}仕^{あま}合^{あま}せ^{あま}ト^{あま}ひ^{あま}
 着^{あま}四季^{あま}小^{あま}相^{あま}別^{あま}き^{あま}こ^{あま}し^{あま}と^{あま}れ^{あま}より^{あま}高^{あま}戸^{あま}川^{あま}の^{あま}辺^{あま}へ
 立ち^{あま}寄^{あま}り^{あま}ま^{あま}な^{あま}ぶ^{あま}が^{あま}身^{あま}の^{あま}姿^{あま}音^{あま}を^{あま}傍^{あま}お^{あま}ま^{あま}の^{あま}身^{あま}
 みの^{あま}且^{あま}翌^{あま}き^{あま}且^{あま}や^{あま}れ^{あま}コ^{あま}ハ^{あま}何^{あま}ゆ^{あま}人^{あま}の^{あま}市^{あま}立^{あま}より

のころ娘も對面せしはるが縁のえ捨て
 かく苦界の中あもあ人のあろ人あん
 ん指のそのりかさい小絆されて戻り星の序
 あから一寸、尋ねて立ち寄りと夢よりまなつ
 けらつト望遠儀を破れるまの聖域秘す
 まるもあく涙を流し涙のまぬあからつ身平
 嫌の顔もは上テお忍れ入てぞんつふたりはと死
 大なる懐中の紙入より命を子まあま出

さしやうのふまのれども歌
 儀待信哈の古新
 美をかあや—やせ—吾子
 ちひまのうへ
 敷の用さりのもあふが着四季
 ちひままで一寸ト
 ありと情も石た
 湯けのふまぬハ
 着るりて
 大名が縁じしろふげえあつろく
 伏うか終あかを飽あき不
 多れて潤か慈ちんと出しゅあぞく
 まり



つうのまか
 貂之巻中終

